



実践 2

『平家物語』の列伝をつくらう (二年) 新しい指導を考える会

1 はじめに

『平家物語』は、人物が魅力的に描かれています。そのため、登場人物に焦点を当てた単元『平家物語』の列伝をつくらう」を設定しました。列伝をつくることで人物像を分析的に読み取り、さらに自分の生き方に照らし、共感したり評価したりする力を身につけさせたいと考えました(※1)。

2 指導計画 (全12時間)

目標

- ▼「敦盛の最期」を読んで、登場人物について解釈したり、自分の考えに照らして共感したり評価したりする。
- ▼列伝づくりを通して、自分が選んだ登場人物について書かれた文章を解釈し、自分の考えに照らして共感したり評価したりする。また、古典作品の登場人物の生き方について考える。
- ▼友達の作品を読み、自分の考えを広げる。

導入 (二時間) 『平家物語』に関心をもつ

- ・DVD 『人形歴史スベクタクル 平家物語』(NHKエンタープライズ) 第五部を視聴する。

第一回 (二時間) 学習の見通しをもつ

- ・教師が作成した列伝の見本(※2)を見て、学習の見通しをもつ。

第二回 (三時間) 「敦盛の最期」を読む

- ・「敦盛の最期」を読み、敦盛に対する自分の考えをまとめる。
- ・教師の見本を見て、読み取ったことをどう言葉で表現するのか考える。

第三回 (五時間) 列伝を書く

第四次 (二時間) 友達の作品を読み合う

- ・自分の作品をまとめた『平家物語列伝』を読み、友達の考えに触れる。
- ・あとがきを書き、学習を振り返る。

3 指導の実際

■「敦盛の最期」を読んで、列伝づくりの基礎を学ぼう (第二次)

初めに、教師が作成した列伝の見本を見せ、列伝には、人物にまつわるエピソードとともに、書き手が「人物をどのように考えているのか」「人物の行動に対してどう思っているか」などが書かれていることを捉えさせました。

そして、「敦盛の最期」を音読し、全員で内容を確認。敦盛の人物像を捉えさせるため、マッピングの要領で、登場人物の行動やせりふ、その他読み取った情報をメモさせました。それをもとに、自分なりに敦盛を解釈し評価させました。その後、再び列伝の見本を見ながら、文章構成や図などをどう活用するかなどを確認させました。

■列伝を書く(第三次)

『吉村昭の平家物語』を読んで、人物を一人選び列伝を書かせます。生徒たちは、

※2 教師が作成した列伝の見本

タイトル
「武士列伝」「美女列伝」など

選んだ人物の名前
若武者列伝
平敦盛

表題
あっぱれ大將軍

目次
一、敦盛について
二、エピソード
三、私の敦盛評

二、エピソード
(一)その一「ひまわりと書かれて」
(二)その二「降伏せしめ」

一、平敦盛について
平敦盛は、清盛の弟である経盛の息子である(一)の合戦で討たれた時十七歳であった。合戦では敗れてしまったが、敦盛は、自らの誇りを貫き通した武士である。その様子が猫がいたエピソードを次に紹介する。

二、エピソード
(一)その一「ひまわりと書かれて」
一、合戦の合戦のことである。義経に攻められた平家軍は、急いで沖の舟に逃れることになった。源氏方の熊谷次郎直実は、自分の高い、敵を討ち取って、手柄を立てた。思っていた。すると一騎、沖の舟で、馬を泳がせ、ひまわりと書かれた。武者が敦盛である。熊谷は敦盛に向かって、大言を吐いた。
「敵に後ろを見せるのは、ひまわりであるぞ。その名を聞いた敦盛は馬の向こうをえ、引き返して来た。」
敦盛は海しかたの、この言葉と、敦盛の武士としての誇りは自覚したのである。

(二)その二「降伏せしめ」
武士の誇りを胸に熊谷に向かっていた。敦盛は、あいつ、東國の乱武者である熊谷に、あいつ、間に細い伏せられし、あいつ、あいつ、熊谷には敦盛を討つことができなかった。我が子の小次郎と同じ平家からの若武者だからである。熊谷は迷った。この時の二スやうだが、原文では次のように描かれてる。
「そもそ、いかなる人にてまじし、頼み、おのれをせたまへ助けまはせせん。」
「なんぢは、たゞ、物事、おのれはねども、武蔵の國」

エピソードは二つ書かせる。どこを読んで、その人物を解釈したかわかるように。

エピソードの中で、人物のせりふなどを原文で紹介させる。

「列伝」は4ページでまとめる。最後に、「私の敦盛評」などと題し、人物に対する自分の解釈や評価を述べる。

人物に関する図などを書いてよい。その際、出典を明記させる。

4 おわりに

本単元では現代語訳を中心としたテキストとして用いましたが、列伝づくりに原文を引用させる場を設けたことで、生徒たちが自ら進んで原文を取り読み、作品への興味が見られました。内容を理解し、作品への興味があれば、原文を読んでみたいという気持ちが起こり、ある程度原文の意味を捉えることができるのだと思います。今後、生徒が古典作品に親しもうとする姿勢を育む単元を考えていきたいと思います。

※1 この単元で言う「列伝」とは、紀伝体による歴史編纂法の一つである列伝から発想を得て、本単元にアレンジしたもの。